

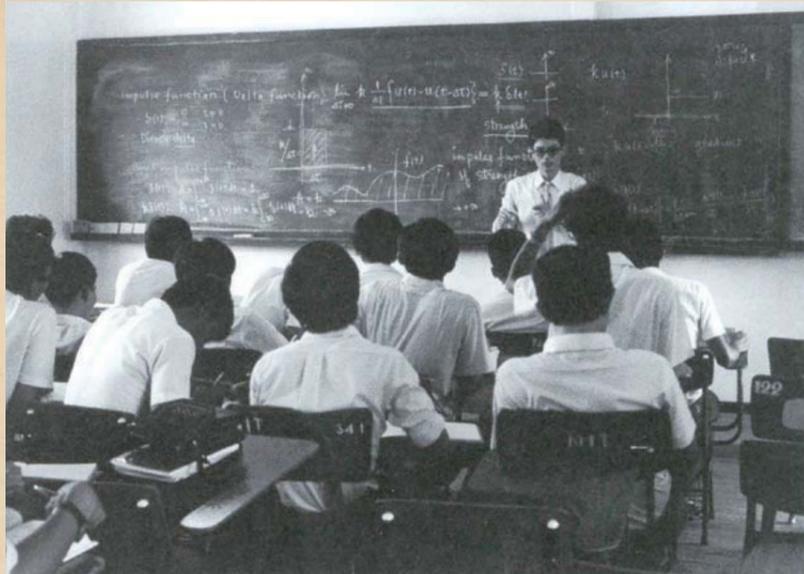
工業化への移行 新たな人材の必要性

自動車やバイクが切れ目なく行き交うタイの首都バンコク。街中には、伝統的な仏教寺院などが残る一方で、高層ビルやブランドショップなどが軒を連ねる。近年、新興市場として注目を浴びるASEANの成長の象徴ともいえる都市だ。

市街地から東へ約30キロ、東南アジアのハブ空港として知られるスワンナプーム国際空港。この巨大な空の玄関の近くに、緑豊かな大学のキャンパスが広がっている。

約1万6000人のエンジニアの卵が学ぶ「モンクット王工科大学ラカバン校（KMITL）」※1。現在、タイ国内で学士号を持つエンジニアの多くがここを巣立っているという。

創設は1960年。きっかけは50年代後半、それまでコメや天然資源などの一次産品に頼っていたタイが、外貨誘致政策の一環として工業化に踏み切ったこと。しかしその変革を担う「人材」が大幅に不足していたため、政府は若手エンジニアの養成機関として訓練センターの設立を決定。タイ政府から要請を受けた日本が、



1972年、東海大学の飯田達彦教授から指導を受けるタイ人の学生

50年のつながり の結晶 タイのエンジニアの 学び舎

ASEAN域内でもトップレベルの工学系高等教育機関として知られるタイのモンクット王工科大学ラカバン校。創設から50年、政府開発援助（ODA）などを通じて日本とつながり続けているこの大学は、国の成長の一端を担うエンジニアの学び舎となっている。



1970年代後半からKMITLは、JICAと協働で他の途上国から研修員を受け入れる第三国研修も実施。アジア、アフリカなどから研修員が訪れ、電気通信技術の移転を行った

History

次世代への財産

※1 モンクット王は1851～68年にタイ国王に在位したラーマ4世の別称。

無償資金協力を通じて「ノンタブリ電気通信訓練センター」の設立を支援することになった。

訓練センターから 専門性を追求した大学へ

創設当初、センターには、放送、電話、電信、送電など電気通信施設の設置・操作・保守方法を学ぶ6カ月のコースが設置された。JICAは引き続き、講師の育成、カリキュラムの策定などの支援を続けていたが、やはりこれだけの期間では、指導者レベルの人材を育成するのに限界があった。

そこで現地を訪問した池田勇人首相（当時）の提案により、センターは64年に3年制の「ノンタブリ電気通信大学」に格

上げ。さらに卒業生の中から選ばれた成績優秀者が日本の大学に編入し、学士号を取得する制度を組み込むことになった。その受け入れ先として手を挙げたのが、それ以降、JICAと連携の下、40年以上にわたり多くの教授を現地に派遣し続けた東海大学だった。

71年には5年制の「モンクット王工科大学」として再編成され、翌年にはバンコク郊外のラカバンに移転、現在の「モンクット王工科大学ラカバン校（KMITL）」が誕生した。JICAはKMITLに対し、データ処理、電気工学、半導体工学の各分野の専門家を78年から派遣。その一人、東海大学の飯島敏雄名誉教授は、「当時は、工学系分野ではタイ語のテキストがほとんどなかった。英語の資料をあ

ちこちから引張ってきて、現地の講師たちと試行錯誤しながらタイ語版を作りましたね」と当時を振り返る。さらに東海大学では、KMITLの講師らを日本に招いて研修を実施。寝る間も惜しんで研究を続ける日本人の研究者に刺激を受け、「帰国後には、仕事に対する姿勢が見違えるように変わってびっくりしました」と飯島教授は話す。

時代を超えてつな がった 人的ネットワーク

97年、KMITLは情報通信分野の研究能力を強化すべく、「情報通信技術研究センター」を大学院に設置。JICAは5年にわたり、同センターの能力強化を支援した。2000年から数回、短期専門家として派遣された東海大学情報通信学部情報メディア学科の濱本和彦教授は、「国際協力にかかわったのは初めてでしたが、タイの学生たちは英語能力にも長けていて優秀でびっくりしました」と話す。もはや、どの専門家も「支援している」という意識はまったくなく、いつの間にか、KMITLと一緒に研究を進めていく仲間になっていった。

現在は、JICAが03年から実施中の「アセアン工学系高等教育ネットワーク（AUN/SEED-Net）」※2のホスト校として活躍しているKMITL。実は、AUN/SEED-Netの事務局長は、東海大学への第一期留学生でKMITL



「情報通信技術研究センター」で実験中の修士課程の学生。最新機材が整備されている

TLの学長を務めたこともあるプラキット・タンテイサンさんだ。「日本の大学の先生方からは、本当にたくさんのお話を学びました。私の息子と娘も東海大学に留学したんですよ」と、流ちょうな日本語で話す。彼はタイ側のキーパーソンとして、自国はもちろん、ASEANの工学系高等教育機関を支え続けているのだ。

昨年、創設50周年を迎えたKMITL。携帯電話の通信アンテナや日本企業向けの不良品検出技術の開発など、近年は多くの国際的な実績も挙げている。一時も途切れることがなかったKMITLと日本の人的ネットワークは、アジアのさらなる発展のステージに向けて、欠かせない貴重な財産になっている。

※2 ASEAN地域の中核大学の工学系分野における研究・教育能力の向上のための技術協力プロジェクト。域内の工学系トップ大学19校と日本の大学11校が学術ネットワークを形成し、若手教員の高位学位取得留学、共同研究、分野別の地域学術会議、メンバー大学間の教員派遣などを行う。現在、2008年よりフェーズ2が進行中。



KMITLの記念碑に刻まれたノンタブリ電気通信訓練センター設立の銘文

